

第6回福島原発事故による長期影響地域の 生活回復のためのICRP ダイアログセミナー 「飯舘—問題の認識と対応—」に参加して

水島 希

例年になく猛暑だった今年の夏が始まる少し前、7月6～7日の2日間にわたって第6回目のICRP（国際放射線防護委員会）ダイアログセミナーが開催された。今回のテーマは“飯舘村”。福島市保健福祉センターに、住民、行政、研究者、報道、チェルノブイリ原発事故経験者など約100人が集まり、福島県の中でも特異な、そして過酷な状況に置かれているこの地域をめぐる、現状と問題の共有が行われた（写真）。

初日のセッションは飯舘村の現状と課題。農林水産省の万福祐造さんが飯舘村の放射線量の概要と営農に向けた除染の取り組みについて概説した後、東北大学の吉田浩子さんが屋内放射線量の調査と、家屋上層部に放射線遮蔽シートを取り付ける試みを紹介された。東京医療保健

大学の伴信彦さんは、飯舘村での車座の対話を基に、放射線の健康影響について地域の方と話す際、重要だと考えている“ものさし”について話された。

続いて保健師の土屋由美子さんは、飯舘村が実施している集団検診や個別訪問などの保健活動を報告。飯舘村民は県内外の広域に避難しており、家族が世代ごとに分かれて住むケースが多いため、全戸訪問には多大な時間と労力が掛かる。これを保健師5名、看護師2名（派遣を含む）で行っているのである。福島大学の宮崎真さんは、こうした保健師や医師、病院など地域保健や医療の資源が不足している現状を分析し、“セルフケア”を念頭においた住民参画を促すことが最重要であると述べた。“ふくしま再生の会”の小川唯史さんは村内で行っている会の活動を紹介し、行政情報や専門家への不信から独自で調査を始め、事業化に至った放射線モニタリング活動を報告。東京大学医学部附属病院の中川恵一さんは、放射線防護対策への地域住民の参加を推奨するICRP勧告103や111を日本の制度にも早期に取り入れる必要を述べた。

午後は、ベラルーシで食品検査を担当しているアナスタシア・フェドセンコさんから食品汚染と日常生活の現状が報告され、次いでNPO“福島のエートス”の安東量子さんとの対話が行われた。ベラルーシでは誰でも食品を持ち込



写真 セミナー当日の様子

んで無料で計測できる場があり、地域の人々は計測を通じて、このレベルの放射線量なら OK、これ以上は食べないといった個別の“ものさし”を作っている。

コーヒープレイクを挟んだ初日最後のセッションでは、飯舘村の農家の方や飯舘の若者たちを中心とした“まてい対話の会”の方々が発言され、毎日が見えないものとの戦いであること、村に残るか残らないか、どこに避難しているかなどで村民が分断されており、自分たちの声が十分聞かれているとは思えない状況であることを経験を変えて語られた。

翌2日目も朝から密度の濃い時間が続いた。飯舘村教育長の八巻義徳さんが、震災前から児童数が3〜4割減った飯舘村立小学・中学校での取り組みを報告。福島県立医科大学の大平哲也さんは飯舘村の集団検診の結果を話された。ほかの被災地と同じく飯舘村でも肥満が増加し、生活習慣病予防が大きな課題となっている。保健師の八代千賀子さんは、子育て中の母親座談会を通じて、参加者が放射線に対する不安とどう向き合ってきたかを報告。当初うつ状態に近かった母親たちが、次第に嫌悪感や不安感を吐き出し、現状と折り合いをつけようと試みる過程が紹介され、思わず私は涙ぐんでしまった。人には自分自身を立て直す力があり、関わりの中で回復する力を得ることができる、という八代さんの言葉は会場全体に染み渡った。

農業のセッションでは、菅野宗夫さんが「ふくしま再生の会」の農地除染の試みを報告。会と協働している高エネルギー加速器研究機構の岩瀬広さん、東京大学の溝口勝さんから、それぞれ農地回復に向けた飯舘村比曽地区のサーベ

イ、土壌の除染法開発の試みが報告された。飯舘村の育種農家、菅野元一さんは飯舘ブランド立ち上げを報告され、農業試験場建設を提案された。いいたてカーネーションの会の佐野ハツノさんは、仮設住宅の管理人として高齢者のうつや認知症悪化の現状を目の当たりにし、着物を仕立て直した“まてい着”の製作販売事業に着手。「状況改善のためにできることはある！」と力強く述べられた。

その後の対話セッションでは、福島民報、福島民友、テレビユー福島など地域の報道関係者も交え、活発な議論が行われた。対話の様子は、飯舘村役場発行の「かわら版 道しるべ」8号（2013年9月5日発行）にも特集されているので是非見ていただきたい*。

全体を通して感じたのは、研究者や専門家が持っている情報が、飯舘村民や村が利用できる形になっていないということだ。対話の中でも、飯舘村に関わる研究者と住民の協働や、情報集約のためのセンターの必要性が論じられた。実は今回のセミナーの後、東京大学内では飯舘村に関わる研究者間の連携が進み始めている。ダイアログセミナーは、情報や研究そのものを飯舘村の住民や行政が利用できる形に開いていくための大きなきっかけとなったと感じている。

（東京大学大学院情報学環）

*「かわら版 道しるべ」は飯舘村役場・いいたて健康リスクコミュニケーション推進委員会が刊行している放射線リスクコミュニケーション情報紙。飯舘村災害情報サイト <http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/> で読むことができる（新着情報から検索）。